

双方向のワークショップで学び合う

「これから楽交のEcoFinis」

「逝き方」を学ぶことは これからの「生き方」を学ぶこと

人生最後のステージは型にとらわれず、自分らしくお別れしたい。でも、何をしたらいいのか、わからない。エンディングノートも筆が進まない……。本当に必要なのは、同じ目線で悩みや想いを共有できる仲間、コミュニティではないだろうか。知識の押し付けではない、新しい形の終活講座。そこでは皆が主役となっていた。

東京・西麻布の一室。ここでは毎週のようにワークショップが開催されている。ある時はミシンを使って裁縫をし、ある時は花を飾り、ある時は輪になって話を

する。また別の時には、エンディングノートを書いてみたり、皆で代わる代わる棺に入る「入棺体験」をしたりもする。

「『これから楽交』というコミュニティ活動です。これからの『生き方』と『逝き方』を皆で学ぶ場として、さまざまな講座を開いています」

そう話すのは、「これから楽交」を開催するウイルライフ株式会社の安田かほ

るさん。ミシンによる裁縫は、自分の着物をほどこき、その布でオリジナルの棺を作るためのものだった。

「着物をほどこく時、人は今までの人生を振り返ることができます。『そういうえばあの時、こうだったわ』と語り合うことが、新しい関係、いわば『新しい家族』を再構築するきっかけになれば」と安田さん。年齢も住む場所も異なる人々が集い、共に作業したり、共に語り合う中で、共に学び合う。

全員に共通する想いは、一つ。「自分らしい生き方って、何だろう？」



「これから楽交」で、終末期における勉強会を開催する安田かほさん(左)

棺も、自分らしさを表現する作品であること。――

「私たちは、『エコフィン』という棺の



自らの着物をほどこく作業の中で、着物に込められた往年の思い出がよみがえってくる。終活は、自らの足跡をたどる行為でもある



段ボール地の「エコフィンIS」(上)も、着物や帯をアレンジすれば、自分だけのオリジナル棺に(下)。なお「エコフィンIS」の販売額の一部は、モンゴルの植林及び国内の森林保全団体「モア・トゥリーズ」に寄付される



メーカーです。使用する素材は、森林資源を有効活用して作られた『トライウォール・バック』という段ボール状の丈夫な素材です。これに内外装を施します。

地球環境に優しく、持続可能な社会を実現する棺を目指して作りました」

棺の製作

から、生き方を考えるワークショップへ。その発端となったのは、利用者から寄せられたアンケートだった。

「ご家族の葬儀などで棺を使っていた方からは、『次に訪れる自分の最期は、自分で選びたい』という声もたくさんいただきました。自分らしい『逝き方』を考えることは、これからの『生き方』を考えることでもあると教えられました」

そこでウイルライフではまず、トライウォールの段ボール地をそのまま活かした『エコフィンIS(イズ)』を新たに開発。寄せ書きや好きだった楽曲の楽譜を書く、写真をプリントする、あるいはお気に入り

りの着物の生地を巻くなど、その人オリジナルの棺に自由にアレンジできる。棺は、単に葬儀に必要な用品ではなく、自分らしさを表現するツールだという発想だ。

そして、「自分らしい生き方」を模索する場として、2011年に「エコフィン・ラボ」を開設。これを発展させた形で13年、「これから楽交」は始まった。

「元もと環境問題に関心の高い方たちが、今度はいかに生き、いかに逝くかを考え始めた。その流れはとて自然なものだったと思います。この考えに共鳴していただいた葬儀業界の方も交えて、活動は次第に広がっていきました」

14年2月、藤沢市辻堂にて新しい「これから楽交」がスタート。ただし、活動が大きくなっても、その基本はあくまで「双方向」。皆が主役であり、皆が自立的に行動する。葬儀の話聞きに来た参加者が、次回は自分の得意な生け花を他の参加者に教える、といった具合だ。

「地縁・血縁・社縁が薄れる中で、死は日常から遠い存在となっています。そんな今だからこそ、生きている間に逝き方を考える行動することが、自分らしい最期につながるのではないのでしょうか」



フラワーアレンジメントに取り組む、「これから楽交」の参加者たち。年齢は様々だが、肩ひじ張らない活動と交流が、人生に彩りと豊かさを与えてくれる